

ツイてない事件より、
抜粹

實近はづみ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

女体化したザップさんがレオくと合う話

ある男の語り

ザップ・レンフロは神々の義眼の少年と出会う前に、とある呪術を受けた。

呪術、と言つても被害が甚大ではないものであつた。あくまで周りからすれば、であるが。

それにより、そんなこともあつたな、というくらいの記憶である。

そもその原因は彼にある。

この街はなんでも起きる街と称されている。そのため、自分に関わりのないことでもいつの間にか巻き込まれてしまう。関わろうとしなくとも不幸や厄介ごとが向こうからやってくる街だ。

そんな街で気をつけろと言ひ含めるのは無理がある。得策でない。そう遠くはない日に気をつけていても無駄だと知るからだ。

しかし、しかしだ。

ザップのように戦う力を持つモノからすれば、この何でも起きる街というのは絶望的ではない。変化を求めるものからすれば、格好の住処と言えるだろう。

とんでもない危険と引換えに。

実際そのようなモノも少なくない。しかし、その予想外すぎる危険さに、自由奔放に過ぐす。ということはなかなか難しいのだ。

ヘルサレムズロットとは、そういう街だ。

まあ、その話は置いておいて。

普段の生活から鑑みても、ザップの生活というのはクズの一言に尽きる。

この街でよくやってこれたな、と賞賛を送るほどにクズクズしい限りである。

であるので、いつ、どこで、誰に恨みを買うものか、知れたものではないし、把握なぞできない。この街では日常茶飯事だからだ。ましてや、彼には愛人と称する女がごまんといる。いつ、かつてのようなことが起こるか、わからないのだ。

かつての1件はそんな中でも過激な愛人との諍いの産物であった。

全く、周りからしてみれば迷惑な事この上ないし、部下のクズっぷりを見せつけられるなぞ不愉快極まりない。

そのため、あの阿呆をしつかりこつてり絞つてやったはずだが、その事件が終わって

からも彼が反省する様子はこれっぽっちも無い。ミジンコほども感じられない。むしろ、そのクズっぷりは増すばかりであった。

今日も今日とてあのクズは、最近出来たばかりの後輩を引っ張り回して遊んでいるのだろう。

なんて仕方の無いヤツ、とステイブ・A・スターフェイズはため息をつく。

しかし、思うのだ。

ザップ・レンフロがどうしようもない屑だということが世の真理のように、

ザップ・レンフロによる被害を受ける人物は決まってるのもまた、世の真理ではないかと。

「……………」

でもまあ。

あの事件については彼の関与は有り得ない。

だって、彼はまだ、このなんでも起きる街、ヘルサレムズロットに居なかったのだから。

Days, 1

気まずい。

ライブラのソファに腰掛けているザップ・レンフロはそう思う。

というのも、先刻から誰も口を開こうとしないのだ。

皆が皆、ザップを見て口を開こうとするが、すぐに閉じてしまうのである。それはあのクラウスでさえも同様に、……いや。

クラウス以外の彼らは呆れていたが、彼だけは掛ける言葉が見つからないとでもいうように所在無さげにしていた。

流石はクラウス・V・ラインヘルツである。こんなクズにも気遣いを忘れないとは。

とは、いつだったか、我らが氷の副官に報告書を溜め込んでいたザップがソファと氷とで一体化し、腕と顔だけは自由にして頂いた時の、同じく、我らが氷の副官からザップが賜った言だ。

その時、恨みがましく呪いの言葉を吐きながら机に向かっていたザップに、クラウスが気遣いの言葉とギルベルト手ずからの温かい紅茶を用意したのだ。それを見て我ら

が氷の副官……こと、ステイーブン・A・スターフェイズは笑顔でそう仰った。

ザップからすれば、いい加減氷を解かしてほしいし、クラウドは優しさを少し……いや、大分履き違えている気がする。まずこの状況を見たらこの束縛を解こうとするのが優しさではないのかと。

……まあ、解いた瞬間逃げ出すのが目に見えているからだろうが。

というより、番頭が旦那に何かしら吹き込んだのだろうか。

と恨みが増しく思ったものだ、あの時は。

と、そんなかつてのことを考えていた渦中の人、ザップはいつもの軽口を叩くようなことも無しに、彼らよりも幾ばくか弱りきった顔をして気まずそうに座っていた。

「……」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

……。

誰も何も言わない。

メンバーの本心は呆れているか、これからのことを憂いているか、そのどちらかだろ

う。

——と、

「……ザップ」

「……う、うす」

ぽつり、とザップの名前を呼んだのはステイブンであった。

ザップは思わず、来た、と身構えた。

しかし、

「……」

「………」

「………はあ、」

あろうことか、ステイブンはため息をついてまた黙ってしまった。

そこで黙るなよ、と思ったザップだったが、相手が相手なだけに口をつぐんだ。

これはもう、自分が言うしかないということか。

「……あ、あのお、」

「……わかつてる。今考えてるんだ、口を出すな」

「……はい」

怒られてしまった。

弁明すらいらないということか。

「……ザップ」

「は、はい」

考えがまとまったのか再びザップを呼ぶステイブンに思わず敬語。加えて、背筋もピンつと伸ばした。条件反射である。

ステイブンはケータイをカコカコといじりながらため息混じりに

「……とりあえず、暫くはそのままだ」

と言った。

これがザップレンフロの体が女になってしまった1日目のことである。

Days, 2

「はあ~~~~~~~~」

「息吐かないでくれる？酸素の無駄遣いよ」

「あー、はいはいすんませんでしたー」

「なに、きしょくわつる」

うげあと到底人とは思えない声をチェインが上げた。ザップはそれに突っ込む気力もないのか、項垂れたままだ。珍しい、とチェインは気味悪がった。明日は雪だろうか。

まあ、状況が状況であるので仕方ないのかとも思うが。

「あら、そーとーキてんのねえザップっち」

「……姐さん」

のそ、とザップが顔を上げた。

けれどその死んだ顔を見てあらま、とK・Kは頬に手を添えた。

だって、顔がいつになく死んでる。

「まあ、日頃の行いよ。ザップっち。諦めなさい」

「ぐっ」

ドシユっ、と何かを貫いた音が聞こえた。と、同時に、何か刺さったかのようにザップは胸を抑えた。

……そう言われてしまえば何も返せなかった。

俯いたせいではらりと垂れ、視界を遮った長い髪を鬱陶しげに払う。

無意識に舌打ちする。

ザップだって日頃の行いが褒められたものでないと知っているのだ。わかっているのだ。けれど、それがザップの日常なのだ。

だから、理不尽だと思ってしまう。というか、理不尽ではないかと思っている。反省とかぶつちやけてない。

それでこそ、ザップなのだが。

「まあ、これを機に生活を見直したらどうだ？ザップ」

「……番頭」

じい、と恨みがましい目でステイプンを見上げる。

同じ男としてもうちよつと何か言うことはないのだろうか。仮にも部下がこんな姿になっているのに。

そんな視線に気づいているのかいないのか、ステイブンは、可愛いじゃないか。なんてカラカラと笑っている。

思わず泣きたくなってソファに突っ伏した。

ステイブンに期待するのはやめた。

というより、考えてみれば、彼がザップを案じて優しい言葉を掛けるなど天地がひっくり返つても有り得ないし見たくない。

ふとソファから顔を上げると、何やら3人で会議中のようなだ。

ちなみに、クラウドスは植物園で水やりの真っ最中である。

「確かに今のままでは任務に支障は……ないが、……うん。この期間。これはいい戒めの機会だ。というわけでザップ」

「は？……はい？」

ちよつと待て。

何を話していたんだ。

何でそんないい顔してんだ、犬女。

嫌な予感がガンガンする。

「報告が来た」

「は？何の……」

「お前に呪いをかけた女のことだ」

「……なにかわかったんすか？」

ぱつと体を起こして座る。

ステイブーンがぴらつと一枚の紙を、読めと言わんばかりにザップによこした。

ザップは素直に受け取り、文字を目で追ってゆく。

「……………は？」

読み終わったのか、ザップがびきつと固まる。

それを見てステイブーンとチェインが満足そうに笑い、K・Kがまあ、自業自得ね。と溜息をついた。

依然、ザップは固まったままだ。

「と、いうわけでザップ。ついでだからその呪いが解ける間、愛人がいない外で任務してようか？」

ぐしや

「はあああああああああああああああ!？」

ザップの絶叫が響き渡った。

Days, 3-1

ザップ・レンフロに掛かった呪いについての報告書

某日、ザップ・レンフロ（以下、ザップ）は彼の愛人の女に、口論の末呪いを掛けられた。数時間は何も起こらなかったのだが、数時間後ザップの体に変化した。

これについて調査を行った結果、今回ザップに掛かった呪いは、対象の性を転換するものである。

呪いを掛けた本人、アンナ・リエール（以下、アンナ）に話を聞いたところ、これを肯定している。

呪いを解く方法だが、アンナによると、対象の呪いを解く条件は、時間の経過ということだ。

期間は、1ヶ月。

その間は何をしようとザップの呪いが解けることはない。

「はあ~~~~」

ゴオオオオオオ

「はあ~~~~」

ゴオオオオオオオオオオ

「はあ~~~~」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

「……なんで俺はこんな所にいんだよおおおおおお!!」

と、いうわけで、ザップは今空港にいる。

周りの乗客はまばらだが、そこそこいる。そんな中、死んだ目をしながら呪われそうな溜息をつくザップに、悲しいかな。周りは銀の長髪で、細身に関わらずボンキュッボンのナイスバディな女性（ザップ）が憂いに満ちた溜息を漏らしているというところでも解釈をし、ちらちらと熱視線を送つてたりするのだが、この1日で目的の空港まで来るのに全力を費やしたザップには見えていない。

それというのも、ザップはこの空港に飛行機とバスと電車を乗り継いで乗り継いで乗り継いで挙句走つて乗り継いでまた走つて乗り継いで乗り継いで……ようやく着いたのだ。

ザップの顔がどよんとやつれている。

「なに、俺恨まれてんの……？」

日頃の恨みか、ただの気分か。

恐らく、前者か。……まあ、どちらにせよたまったものではないが。

そういうザップの手には、出発時間ギリギリのタイムスケジュールが握られていた。分刻みである。ときたま、ここ37秒で移動とか書いてある。ふざけんな。普通のやつだったら5分かかるわ。タイトなスケジュールのせいでろくに寝れなかったザップの

顔は鬼の形相になっている。寝れたのは飛行機の時間だけである。というか、飯もまだ。さつきから腹が鳴りっぱなしだ。帰りもこれをやんのかと思うと遠い目になってくる。

このタイトなスケジュールは出発前、いつの間にか出来ていた『今』のザップのパスポートとともにいい笑顔ステイブンに渡されたものだつた。

ふと、出発前のやたら黒い笑顔の眩しいステイブンがまぶたに蘇つた。

「ザップ、いいか?……まあ。その身体じゃ、無いとは思うが、万一に備えて愛人がいないヘルサレムズロットの外での任務をもらう。……ああ、わかつてると思うが、手を出すなよ?」

何にとは、言わないが。

とは、出国前のステイブンの言である。

「……つたく、心配性なこつて」

精一杯の皮肉。

まあ、届く相手がないのだから。

「あー、くそっ!とにかくメシだメシ!!」

腹が減つては戦はできぬ。とりあえずメシだ!

そう結論つけて、言うが早いか空港を後をにしたのだつた。

Days, 3—2

「今回の任務は尾行、及び身辺調査だ。」

「はあ」

「対象は、こいつだ」

ぽいつと投げられたのは男の写真と、男の情報であつた。

「えーと、……アンディー・ミラー？」

「そうだ」

金髪に黒縁眼鏡。

目元には隈があり、頬も痩せこけている。人相が悪いのも手伝つて、一目見ると堅気には見えない。

「なんすか？ソツチの人すか？」

「いんや、全然」

「ふーん……あ、ほんとだ」

パラパラと捲っていくと、確かに男の経歴はクリーンなものだった。両親は共働き。勿論、クリーンな会社で。アンディーもスクールを出てそのままクリーンな会社に就職。その後結婚し、子宝にも恵まれている。

しかし、

「こっから、変すね」

「ああ」

アンディーの経歴がおかしくなっていたのは、7年前からだ。

7年前、彼は子供と妻を事故で亡くしている。生きていれば子供は青年になろうかという年であった。

それからの経歴が、会社を辞めたり暴力沙汰でしょっぱかれたり、その後も必要な金がなくなると生活にドンづまり、終には盗みに手を出し警察から逃げる毎日だという。

「けど、こんくらいじゃよくある話じゃないですか？」

「そうだな。……けど、問題はその後だ」

「あと？」

ステイーブンの言葉にザップが資料を目で追うと、ああ。……あった。明らかにおかしい箇所が。

「これっすか」

「それだ」

「確かに、羽振りがめっちゃいいっすね」

「ああ。それに、オトモダチもふえたようだしな」

ニイ、とステイブンの口元を釣り上げた。ザップも同意する。

……しかし。

ふと、違和感を覚える。

「じゃあ、話はこれくらいにして、……真面目に働くんだぞ、ザップ？」

それも、ステイブンの一言で霧散した。

「はーっ、食った食った」

喫茶店のドアを開けたザップは、そのまま歩いて行く。

飯の後は宿だ。

ステイブンに渡されたメモにはこちらへんの宿を予約してあると書いてあった。

「えー、……サンタリア？ つてどこか」

メモに書かれた地図にはこの近辺と記されている『ホテル・サンタリア』。

その地図通り、しばらく歩いていると歩道に植えてある木から飛び出すようにして一本の背高い建物が見えた。

「ああ、あそこか」

見上げてみると、ヘルサレムズロットのビル群に見慣れているせいだろうか。そこまですごくは感じない。しかし、周りが背の低い家屋に囲まれているせいで遠くから見ると、このビルだけ突きぬけて高く感じる。

真つ白いビルに黒く『S a n g r ・ a』と書かれている。どうやらここであつていようだ。

「……だな」

「ここ『ホテル・サンタリア』に、アンディー・ミラーが働いているのだ。従業員として。」

「わざわざこんな目立つところで働いてるとはな」

まあ、何か理由があるのだろう。ザップの知るところではないが。

「さーて、んじやそのツラ拜んでやりますか」

落ち葉一つない綺麗に掃除されたロータリーを進み、ザップは無駄に大きい自動ドアをくぐった。

中へ足を踏み入れると、思ったよりも高い天井に清潔感のある内装。どうやら宿泊代は高そうだ。これも給料から天引きだろうか。

うげ、とザップは苦い顔をするが、とりあえず泊まらなないと後が怖いので受付嬢に声をかける。

「すみません、予約したんですけど」

「はい。お名前をお伺いしても宜しいでしょうか？」

「えー、ステイブン・A・スターフェイズです」

「スターフェイズ様ですね」

少々お待ちくださいと言われたのでそのまま待つ。傍にパンフレットが置いてあったのでパンフレットを見て待つ振りをしながら受付嬢を盗み見する。

……かわいい。

ザップが今こんなでなければ口説いたであろう可愛さだ。声も可愛い。胸もそこそこ。まつげも長い。唇も――

「お待たせしました。ザップ・レンフロ様ですね。只今ご案内いたします」

「ああ、はい……」

「では、彼がお荷物をお持ちいたします」

彼？

すつ、と出てきたのは細身で長身の男。金髪だ。

口元がやや上がるだけで、ホテルの従業員にしては愛想のない男だ。

それどころか目元にメイクで隠しきれない隈があり、頬は痩せこけ、はつきりいつて口元が上がっているのが逆効果だ。

そしてその細身を包んでいるスーツについている名札には

〈アンディー・ミラー〉

ザップはにやりと気づかれないよう、にやりと笑った。

「それではレンフロ様、お荷物をお持ちいたします」

しかしそれはおくびにも出さず、お願いしマースと荷物を差し出した。

「ではこちらに」

「へーい」

アンディーがくると背中を向ける。

縦に長い背中意外にも姿勢が良かった。……一応ホテルマンだからだろうか。顔

色と人相は悪いが。と大変失礼なことを考えていた。

ザップはその背中について行く。女の身体だと歩幅が違うので歩くのにいつもより労力を使った。

豪勢なエレベーターの扉がボタンを押した瞬間、チンと音を立てて開く。おお、待ち時間ゼロ。

そんなに客がないのかと疑ってしまった。余計なお世話だ。

「どうぞで」

促されてエレベーターに入ると、扉と反対側に大きな鏡があった。

なんととはなしにそれを見ていると、やはり自分の背の高さに違和感を感じた。

普段であればアンディーと同じくらいだろうに、今のザップはそれより幾分か、……いや、頭一つ分くらいは違うだろう。

男として、なんとなく悔しい。

そうこうしてる間に、エレベーターがチンと音を立てて止まった。4階。

アンディーがボタンを押し、どうぞ。と控えめに降りるよう促された。

ザップが降りるとアンディーはエレベーターのボタンから手を離して降りてきた。目の前に部屋が連なる。ルーム番号は全て金の文字で書かれている。

それを見ながらアンディーについていくと、一番端の部屋で止まった。

「こちらでございます」

300号室。

アンディーが鍵を開ける。

向かつて右にユニットバスがあり、レストルームは別だ。部屋はベッドが1つ。だいぶ大きい。それにふかふかしている。おお、と思わず声を出してしまう。中は思ったよりも広い。アンディーが我がホテルのベッドはうんちゃらーと言っていたがよくわからなかった。

「荷物はこちらに置いておきます」

「あーはい。あざっす」

「それでは、何かありましたらフロントまで」

ひとしきり説明らしきものが終わると、アンディーはトスッと荷物を置いていつてしまった。

なんとも素っ気ない。終始一貫してニコリともしなかった。いや、してもなんというか、恐ろしいだけだが。

まあいいか。

ザップは大して気にせず荷解きを始めた。明日には部屋が足の踏み場がなくなっていることだろう。

「さあて、どっから始めつかな
ザップは唇を舐めた。」

Days, 3—3

とりあえずは情報収集だな。

荷物の中から必要なものを出しながらうんと領いた……のはいいが、問題がある。

今のザップは男の姿ではない。

いつもはそこらへんにいるカワイイ女の子を引つ掛けてオタノシミながら情報収集できたのだが、今はそんなことも出来ない。万一出来たとしても女の身体だし、ステイブンからも釘を刺されている。

つまり、今のザップには地道に情報を集めるしかない。

うーん、どうしたものかとザップは首をひねった。

だつて普段はあんまり地道にとかやらない。苦手なのだ。

「ん？　そういうやつて……」

ふと思いつき、ザップはぺらりと何かを取り出す。

パンフレットだ。

受付で見っていた（振りをしていた）ものである。

ザップはそれをパリリと捲り、端から端まで目を通していく。そして、ぴたりとある1点で目を止めた。

『8F ラウンジ』

ザップはニツと口の端をあげた。

「よっしゃ、決まりだな」

もう用はないというようにパンフレットを投げ捨ててザップは部屋の扉を開いてエレベーターに乗った。

ポーン

軽い音がしてエレベーターの扉が開く。

まず目に入ったのは薄暗い照明に照らされたシャンデリアだった。角度によって様々な光り方を見せるその下をザップは歩いて行つた。

まだ夕方だからだろうか。人はあまりいなかった。

ザップは適当に席を見つけて座った。と同時に影が差す。ぱつと顔をあげると、中年くらいであろうか。髭を生やした細身のバーテンダーが目の前にいた。なんだかいけすかねえ、とザップは直感的に思った。だって、なんか番頭っぽい。

「何にいたしましたようか」

やけに流し目で見られる。オイ、イラつとするからやめろ。キモい。
必然的にザップの対応がおざなりになる。

「あー、……ハイボール、ロックで」

「かしこまりました」

ザップが言い終わると、バーテンダーはにつこりとステイブンに似た胡散臭そーな笑顔で去っていった。バーテンダーが居なくなつてからうげ、と顔を歪める。嫌なことを思い出してしまった。先ほどの胡散臭い笑顔を見たせいで出発前のステイブンのいい笑顔を思い出してしまったのだ。

（あ~~~~くそ、忘れてたのに……ん？）

あれ？

ぶるぶるという振動。

尻だ。尻ポケットに違和感。

触ると硬いものが。

携帯だと思ひ至る。ぶつぶつと震えている。

ばかり、と開いてぽちぽち弄る。

『You got mail』

……メールだ。

差出人、ステイブンから。

え、と思う間もなくザップの顔がひきつった。

『凍らすぞ?』

(どこから見てんだあの人はあああああああああ!!!)

思わずバンつと携帯を閉じる。

心臓がバクバク言っていた。

恐ろしい。

つつーか、タイミングが怖い。怖すぎる。信じられない!アンビリーバボォー!!

ザップは混乱していた。

(つつーか、なん、なんでわかんだよ!実は見てんのか!?千里眼!?千里眼の持ち主なの!?
実はあの人の能力ってエスメラルダ式血凍道じゃなくてホントは千里が――)

ぶぶぶつ

びくつ

手の内で震える携帯と同時にザップも震えた。見るとチカチカとイルミネーションが光っている。表示されるメールのマーク。

「……………」

怖い。

「うつへえ!？」

びつくうつ!

思わず出てしまった変な声に、何人かの客が振り返る。ザップはバツと口を掌で覆って小さくなった。なんでもないと判断したのか客はざわざわと雑談を再開した。ザップは胸をなでおろすとそのまま携帯を開け、

――驚愕に固まった。

『ステイプン・A・スターフェイズ』

なんとびつくり。着信である。

(で、で、で出たくねええええええええええ!!!!)

うおおおおお!!と内心悶える。

だらだらと冷や汗が出る。怖い。なんか、もうやめてください。すみませんでした。めっさ出たくない。テコでも嫌だ。……だが出ないわけにはいかないのだ。わかるか、この気持ち。オイ。

いつの間にか注文したハイボールを持ってきたバーテンダーが心配そうに声をかけてきた。

鬱陶しいと思ったが、ちよつと抜けるすぐ戻ると早口で捲し立てて席を立った。そのまま脇目もふらずラウンジの端の方――ザップの声が届かないであろう所へ行つた。すぐに携帯を構える。まだ携帯は震えていた。

ドツ、ドツ、ドツ……

嫌な意味で高鳴る鼓動を感じるが、ザップ・レンフロ今こそ男を見せる時——！

そおい！とボタンを押す

ポチツ

『やあ、ザップ。随分じゃないか？ん？』

出たああああああああ!!魔王だぞおおおおおおお!!!!!!

「……………」

『というかお前出るのが遅かったが……どうした？』

「……………」なんでもねえっす、スンマセン」

珍しく言い訳をせず（しても言い負かされると知って）殊勝な態度をとったザップに、ステイーブンはふうんと考えるような間を開けた。

『……………」まあ、いいさ。ところで順調か？』

「えー、えーつと着いたばっかなんs」

『ん？』

「……………」

ゴゴゴゴゴゴ……と地鳴りが聞こえるようだった。

何この人、ちよう怖い。

電話……というか声だけだというのにこの威圧感。ザップには出来るだろうか。……いや、多分無理だと思った。そういえば文字だけでも威圧感が半端なかったのだった。

「……全力で頑張らせていただきマース」

『いい心がけだ』

健闘を祈るよ、と無駄にいい声で言われても恐怖でしかない。……あざーす、というザップの気の抜けた返事を最後に電話は向こうから切られた。ブチっと。

ちようこわかった。

「うへえー」

しばらくは大人しくしよう。

向こうは同僚が女になったとしても容赦が無い鬼のような上司だ。

またあんな恐怖は

ぶぶぶつ

「……」

『You got mail』

ホラーかよ!!!